

フィヒテ『学者の使命』（1794年）における人間像

中島 聡・村下 邦昭*

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

*岡山理科大学非常勤講師

(2011年9月29日受付、2011年11月7日受理)

1 はじめに

フィヒテは1794年、イエーナで知識学の講義と共に『学者の使命に関する数回の講義』（以下『学者』と略す）の講義を行った。そこでは、学者とは何か、という問いの前に、人間とは何か、という問題が扱われている。本稿では、『学者』において、どのような人間像が描き出されているかを扱う。これによって、初期知識学（1793/4—95）における人間（有限我）の在り方を、あるいは人間の具体的な像を明らかにする。

2. 人間自体の使命

フィヒテは「学者の使命はいかなるものか」（VI S.293）という問いに対して、次のような前提となる問題を挙げる。それは学者が社会の中で区別された存在であるため、「社会[Gesellschaft]における人間の使命はいかなるものか」（ibid.）という問題が挙げられる。さらに高次の問題として「人間自体の使命はいかなるものか」（ibid.）が挙げられる。その人間、自我についてフィヒテは次のように述べている。

「自我は経験的諸限定においてでなければ、自分自身を決して意識することはなく、また意識できないということ、そして、この経験的諸限定が必然的に自我の外に或るものを前提としているということは確かに真である（中略）。人間が自分の身体と呼んでいる人間の身体は既に自我の外の或るものである。この結合ぬきにしては、人間は決して人間ではなく、むしろ我々にとって全く考えられない或るものであるだろう」（VI S.295）

有限我、つまり人間は限定されていない状態では純粹我であり、それは意識されることはない。なぜならば、意識は自我の能動性が非我を通じた反射（反省）によって自己自身へと還帰する活動によって捉えられるものだからである。したがって、有限我は意識する以上、自我の外なる或るものによって限定されている。その限定は人間の身体にも及ぶ。身体は意識によって感じ取られるものであり、自我の活動を制限している。しかし、この制限があるからこそ、人間は人間として意識されるのである。このことを前提としてフィヒテはさらに続ける。

「人間が理性を持つ限り、人間は自分自身の目的である。すなわち、或る他なるものが存在すべきであるが故に、人間は存在するのではなく——むしろ、人間が存在すべきであるが故に、人間は端的に存在する。つまり、人間の単なる存在が人間存在の最終目的である。あるいは同じことであるが、我々は人間存在の目的を矛盾なしに問うことができない。人は、人間が存在するが故に、存在する。絶対的存在、つまり自分自身のための存在というこの特徴は、人間が単に全く理性的存在者として考慮される限り、人間の特徴であり、人間の規定である」（VI S.295f.）

人間の目的は自分自身の存在である。人間は他のものがあるから存在するのではなく、自分自身が存在するが故に存在する。もし、他のものがあるから存在するというならば、それは唯物論になってしまう。人間は存在するが故に、存在する。これが人間存在の最終目的となる。この目的が果たされた時、自我は純粹我、あるいは絶対我となる。つまり、人間は絶対我を目指していかなければならない。しかし、これは人間が人間である以上、到達できない目的、理想である。だが、この理想に向かっていくことこそ人間に課せられた目的である。絶対我は何ものにも限定されない。他方、人間は自己自身を限定している。この限定もまた

課せられた目的である。「人間は自己自身を限定するべきであって、他なる何ものかによって決して限定されるべきではない」(VI S.297)。「それ故、あらゆる有限的な理性的存在者の最後の使命は、自己自身との絶対的な一致、恒常の同一性、完全な合致である」(ibid.)

しかし、現実的には、人間は自己自身を限定しつつも、大部分において外的な物によって限定されている(ibid.)。だが、物に限定されていることに安住するのではなく、人間は物に働きかけて、これを自身のものとしなければならない。「人間は物を変容し、物そのものを人間の自我の純粋な形式と一致するよう試みなければならない」(VI S.298)。この変容する力の獲得が目指されなければならない。フィヒテはこの獲得する方法を「技能」(Geschicklichkeit; ibid.)と呼ぶ。

「この技能の獲得、つまり、一方では我々の理性と我々の自己能動性の感情が目ざめる前に生じた欠点のある傾向性の抑制と根絶の技能であり、他方では、我々の外なる物を変容し、それを我々の概念にしたがって変化させる技能である。——敢えて言えばこの技能の獲得は修養[*Cultur*]と呼ばれる。そして、この技能が一定程度獲得され、規定された度合もまた修養と呼ばれる。修養はただ諸程度の違いがあるだけである。しかし、修養は無限に多くの度合がありうる。——人間が理性的・感性的存在と見なされる場合、修養は人間の究極目的、つまり、自分自身との完全な一致のための最後にして最高の手段である。——すなわち、もし人間が単なる感性的存在と見なされる場合、修養はそれ自体、最終目的である」(VI S.298f.)

欠点のある傾向性とは、自我の能動性に対して、非我の能動性を前提とした活動と考えることができる。フィヒテはこのような活動をぼんやりとした[dunkel]感情と述べる¹⁾。そして、自我の前意識的な活動は目的のない活動である。これを克服するために技能が用いられる。フィヒテはこのことを知識学より前の時期に既に述べている。

「修養[*Cultur*]は、完全な自由という目的への一切の力の訓練[Uebung]、つまり、我々自身でも、我々の純粋な自己でもないもの一切からの完全な独立への一切の力の訓練を意味する」(『フランス革命論』 VI S.86f.)。

「自由のためのこの修養は……人間が感性界の一部である限り、人間の唯一可能な究極目的である。この最高の感性的な究極目的ではあるが人間自体の究極目的ではなく、むしろ、人間のより高次の精神的な究極目的に対する手段は、理性の法則と人間の意志との一致である」(『フランス革命論』 VI S.89)

この修養を、人間は感性界の中で行っていくが、人間は有限的存在であるから、そうしなければならない。そもそも「人間は、自体的に到達できない自由へと無限にいつそう近づいていくべきである」(『全知識学の基礎』 I S.117)。しかし、この修養が、あるいは自由への無限接近が人間の究極目的にならないのは、人間自体が本来、既に自由だからである。しかし、感性界において、人間は自己の外のものに制約されている。それ故、修養も自由への無限接近も「最高の実践的目標」として立てられるのである(ibid.)。

かくして、修養は無限への接近という目的とみなされる。しかし、修養は感性的な究極目的であるため、さらに高次の目的が見出されるべきである。それは自我の自己自身との一致である。そのためには、自我が非我を完全に自我化する必要がある。しかし、自我が有限我である以上、この自我化、自我の自己自身との一致は果たされることはない。とはいえ、この無限に進行する自我の活動を自我は行わなくてはならない。それが人間の使命である。

「理性なき一切のものを自己に服従させ、自由に、そして自分自身の法則にしたがって、それを支配するというのが人間の最後の究極目的である。この最後の究極目的は、人間が人間であることを放棄するものでなければ、または、人間が神になるものでなければ、全く到達されないし、永遠に到達されないままでなければならないものである。この最終目標が到達不可能であり、その道のりは

無限にあるのでなければならないということが、人間の概念に含まれている。したがって、この目標に到達することが人間の使命ではない。しかし、人間はこの目標にますます近づくことができるし、またそうであるべきである。この目標への無限な接近が、人間としての、つまり、理性的ではあるが有限な存在者、感性的ではあるが自由な存在者としての、人間の真なる使命である」（VI S.299-300）

「完全性は人間が到達できない最高の目標であり、無限に完成していくことが人間の使命である」（VI S.300）。このことは人間を孤立したものとして考えた時に現れるものである（cf. *ibid.*）。理性なきもの、つまり、非我を克服し、一切を自我のものとするのが人間の使命である。しかし、それは人間が人間である以上、果たすことのできない使命である。とはいえ、到達不可能であるからといって、放り出すことのできない使命である。人間は無限へと、非我の克服へと至らなければならない。孤立した個人としての人間は、この無限への努力を持っている。この努力こそが人間の使命である。そのために人間は技能と修養を持っている。

3. 社会における人間の使命

人間は孤立して存在することはできない。必ず何かしらの非我（モノ）あるいは他者との関係が存在している。その場合、人間の使命はどのようなものになるのか。

「人間はいかにして自分と等しい理性的存在者を、このような存在者が自分の純粋な自己意識の内に全く直接与えられていないにもかかわらず、自己の外に想定し、承認するのだろうか」（VI S.302）

これが社会における人間の使命について重要な問いになる。そして、フィヒテは社会を「理性的存在者相互の関係」と定義する（*ibid.*）。あるいは、社会とは、「概念による交互作用、つまり合目的共同体と、カントの述語でもって私が概念化するものである」（VI S.305f.）。

但し、他の理性的存在者の表象は経験を通じて知られるのではなく、「我々は、或る経験を我々の外なる理性的存在者の現存在から説明するところのものである」（VI S.303）。経験は我々の外なるものを教えるのではない。我々が外なるものの表象を経験の中に持ち込むのである（*ibid.*）。したがって、どのようにして他の理性的存在者を説明するか、ということが問題になる。

「人間が常に自己と一致しうるために、人間の外にあるもの全てを、これについての自分の必然的な概念と一致させようとする。人間の概念は、人間にとってその他の点で、概念に対応する客観が実在しても実存在しなくてもどちらでもよいというように、ただ矛盾がないということだけでなく、実際にまた概念に対応する何かが存在するべきでもある。人間の自我の内にある全ての概念に対して、非我の内に表現や対像[Gegenbild]が与えられているべきである」（VI S.304）

自我は非我を自我化しなければならない。それが自我の自己との一致である。自我は自己の内から、自己に一致するように自我の外なるものの概念に対応するものを持つべきである。自我の内にある概念は全て非我の内にあるものである。このような活動によって、自我は自己自身を変容していかなければならない。しかし、自我の内から現れない存在がある。それが他者である。

「人間と同等な理性的存在者が自己の外に与えられているということが人間の要求に含まれている。

人間はこのような存在者を産出することができない。しかし、人間はこのような存在者の概念を非我の観察の基礎に置き、これに対応するものを見出すこと期待する」（*ibid.*）

問題が元に戻ったわけであるが、他の理性的存在者が非我の内にあることは明らかにされたわけである。しかも、人間（自我）は他の理性的存在者を非我の観察の基礎においており、それが見出されることを要求し、見つけ出すことを期待している。そして、これは「人間の根源衝動」である（VI S.306）。

「人間が……理性的存在者と共に社会に参入するという制約においてのみ、人間は理性的存在者を想定することが可能である。——したがって、社会的衝動は人間の根源衝動に含まれる。人間は社会の内で生きるように定められており、人間は社会において生きるべきである」 (ibid.)

「根源衝動は、我々と同等の理性的存在者すなわち人間を見つけ出すことであった。——人間の概念は理想的な概念である。というのは、人間の目的が、その目的が人間である限り、到達しえないものだからである。各個人は人間一般について各自、特別な理想を持っている。その理想は確かに実質上異なるものではないが、しかし程度において異なるものである。各人は、各人が人間と承認するという自分自身の理想に従って吟味する。各人は各人の根源衝動によって、他者すべてが自身の理想に似ていると見出すことを望んでいる。人間はあらゆる方法で他者を試み、観察する。そして、人間が他者を理想以下であると見出すならば、人間は他者を理想へと高めようと試みる。精神と精神とのこのような戦いは、より気高くより良い人間が常に勝つ。かくして、社会を通じて人類の完成が成されるのである。そして、我々はこれによってまた同時に全社会の使命をも見出したのである」 (VI S.307)

人間は社会に参入しようとする衝動を持ち、そこに理性的存在者すなわち他者を見ていく。その他者は各自の理想と同じであることを求める。各個人は対等であらねばならない。そして、もし、理想以下の他者を見出したならば、各個人はその他者を理想の高みへと引き上げなければならない。つまり、人間は自己を高めるとともに、他者も引き上げなければならない。これが修養である。各個人が互いに自己を高めることによって人類の完成が成される。これが社会の定義であった理性的存在者の相互関係である。概念による交互作用も精神と精神の戦いによって表される。つまり、人間の概念は自己を絶対我へと自ら高める存在である。この時には、精神が高められるのであって、自我の外なるものである肉体は問題ではない。精神同士の戦いによって各精神は無限に高められる²⁾。社会はその戦いの場である。各個人は好んで闘争の場に入ることはないだろうが、社会の中で生活する以上、他者との闘争は不可避である。しかし、その闘争は否定的なものではない。

「衝動[社会的衝動]は交互作用、相互的な影響、相互的な授受、相互的な受動と能動を目指すのであって、他者がそれに対してただ受動的な関係に立つところの単なる因果性や単なる能動性を目指すのではない。その衝動は、我々の外に自由な理性的存在者を見出し、彼らと共に社会に参入することを目指す。その衝動は物体界におけるように従属[Subordination]を目指すのではなく、協調[Koordination]を目指す」 (VI S.308)

物体と人間は異なる。人間が物体に対して行う従属(支配)とは別に、他者に対しては協調を図ろうとする。あくまで、様々な相互的な活動の中で、各個人は他者と交わる。そして、有限的な存在は「交互作用の内に在り、その限りで有限的な存在は個人[Individuum]である」 (III.2.392)³⁾。さらに言うならば、「我々が自身を個人とみなすのと同様に、我々は自身を常に生の内存在するのであって——哲学することや考案すること[Philosophieren und Dichten]にただ存在するのではない」 (ibid.)。各個人は存在するがゆえに存在する。そして、哲学や考案といった思惟の内に生を見出しているのではない。

「自己自身との完全な形式的一致の法則によって、社会的衝動はまたポジティブに規定されている。かくして、我々は社会における人間の本来的な使命を獲得する。——人類に属する全ての個人は各自異なっている。人類が完全に一致するところはただ一つのみであって、それは人類の最後の目標、つまり完全性である。(中略)社会における各個人は少なくとも自分の概念にしたがって、他者をより完全なものへととなそうと努力する。また、各個人は人間について作り出した自分の理想へと他者高めようとする。——したがって、社会の最後にして最高の目標は全ての可能な成員との一致と合致である。しかし、この目標の達成は人間一般の使命の達成——絶対的な完全性の達成を前提にしている。それ故、人間が人間であることをやめる限りでなければ、そして神になるのではない限りであるならば、完全性と同様に達成不可能である。したがって、確かに全ての個人との完全な合一は社会における人間の最後の目標であるが、しかし、人間の使命ではない」 (VI S.309f.)

各個人は自己の理想との一致を行わなければならないが、その際、社会に属する人間は他者をも高めていかなければならない。その目標は自己自身との一致、合致であるが、前章で見たように、この目標の達成は人間が人間である以上、不可能である。これは更に社会という枠組みの中で行われるのであれば、各個人は既に限定されている。そのため、社会の中では自己との一致は確かに最後の目標になるが、しかし各個人が限定されている以上、真に自己との一致への活動は不可能である。また、各個人同士が一致しあうことが最高の目標であれば、やはり、自己との一致は真に行われえない。しかし、このような活動は、人間の使命である以上、なされなければならない。

「全ての個人との完全な合一、合致へのこのような接近は結合と呼ばれる。それ故、緊密さの点では常により堅くなり、範囲の点では常により広がっていく結合は社会における人間の真なる使命である」（VI S.310）

各個人がより強固に結びつきあい、その結びつき（結合）が広がっていくとき、人間は社会における真なる使命を獲得する。この時、各個人は互いに働きかけあっている。つまり、他者に働きかける技能と、他者からの働きかけに対して、それを最大限に引き出す受容性とが人間には備わっている（cf. VI S.310f.）。そして、繰り返しになるが、各個人は交互作用によって互いに理想へと高まっていかなければならない。これによって人類の完成が成される。この完成を目指すことが社会における人間の使命である。

4. 社会における身分について

『学者』において究明されるべき問題は、学者の使命である。その学者という身分は社会における身分である。そのため、問題はこの「身分」（Stand）の定義である。フィヒテは身分の問題を二つに分ける。「偶然かつ我々の関与なしに生じた不平等、すなわち、自然的な不平等は自然によるものであると言えるだろう。身分の不平等は道徳的不平等のように思われる」（VI S.312）。フィヒテは後者を重視し、「身分という制度の目的が何であれ、この制度を作ることが許されているかどうかという道徳的問題」と考える（VI S.313）。フィヒテはこれを直接解明するのではなく、まず自我と非我との関係を論じる。

「全ての理性法則は我々の精神の本質の中に基礎づけられている」（ibid.）。この理性法則は経験をつうじて意識に上ってくる。特に実践的な理性法則の場合、意識は「衝動」として現れる（ibid.）。

「全ての衝動の基礎は我々の本質の中にある。しかし、基礎以上のものではない。各々の衝動は、それが意識に上ってくる場合には、経験をつうじて目覚めされなければならない。そして、衝動が傾向性になり——衝動の満足が欲求になるであろう場合、同じように繰り返される経験によって発展させられなければならない」（ibid.）

衝動は何かへの衝動であるので、衝動が衝動として意識されるためには、つまり、経験されるためには、反省を経なければならない。そのため、自我の外に非我が想定されることになる。その非我への傾向性が衝動と呼ばれる。衝動が反省をつうじて満足されたとしても、すぐ次の衝動が生じる。衝動は飽くなき運動である。したがって、衝動の満足は新たな欲求をもたらす。このような衝動の活動によって、衝動は新たなステージへと発展していくのである。

しかし、「経験は我々自身に依存するものではない。したがって、我々の衝動一般の目覚めと発展もまた我々自身に依存するものではない」（ibid.）。経験の根拠は「独立的な非我、つまり自然」である（ibid.）。衝動は反省されるのだが、その反省の契機を自我は持っていない。あくまで非我によって自我の能動性は自己自身へと返されるのである。そこに経験や意識、欲求が生じる。

そして、自然が他の部分と完全に等しくないように、各個人も他者と完全に等しくはない。これが自然的な不平等である（cf. VI S.313-314）。この不平等は自我が自由によって取り除くことができないものである。なぜならば、自然が意識されるのは、自我の能動性が限局されているからである。その自然を取り去ってしまうと、自我は自然だけではなく、自己自身も意識できなくなる。しかし、この不平等は自然的なものであって、社会において適応されると、別の法則が要求される。つまり、各個人が同じように完全性へと高めら

れる、という法則である。あるいは、「様々な理性的存在者全てがまた互いに同様に形成されるべきである」(VI S.314)。これによって、社会の構成員各自は平等になるのである。だが、このことは無限に高められていくために、達成不可能な法則である。しかし、達成不可能であるからといって、これを放棄するのではなく、この法則に接近する「努力をするべき」である(VI S.315)。

ところで、この相互的形成には二つの衝動がある。

「一つ目は伝達衝動、すなわち、我々が素晴らしく形成されている側面から誰かを形成しようとする衝動、他者全てを我々自身を、我々においてより良き自己へと、できるかぎり等しく作り出す衝動。二つ目は——受容の衝動、すなわち、或る人が素晴らしく形成されているが、我々は素晴らしく形作られていない側面から他者全てによって自己を形成してもらおうとする衝動」(ibid.)

能動的に他者を改善しようとする衝動と、受動的に他者から形成してもらう衝動という相互関係がある。この相互関係によって、人類はより高みへと上ることができる。自然的な不平等の下ではこの相互関係に限界がある。自然の形成は不完全であり、それを人間が全て補うとすれば、自然との関係および社会的関係の中に入らなくてはならない。

また、人間はこの相互的形成を成す際に、自然との闘争状態に入らねばならない。「理性と自然は絶えず闘いづけている」(VI S.316)。この時、個人の力だけでは自然に勝つことは難しい。社会という共同体において人間が一丸となって自然との闘争を行うことによって、自然の力を弱めなければならない(cf. VI S.316)。このようにして自然的な不平等は克服されていく。しかし、この時、人間が自然に委ねている部分が、克服できない自然の部分が残る。

「今まで展開された諸制約の下で、私は個人として、自然に身を委ねて、私の内で或る特別な素質を面的に展開している。なぜならば、私はそうしなければならないからである。その場合、私は何ら選択できず、むしろ不本意ながら自然の導きに従っている」(VI S.317)

自己を修練させて、完全性へと人間が向かうとき、そこには自然が立ちはだかつている。しかも、個人だけで完全性へと向かうことは、自己を面的にしか発達させることしかできない。なぜならば、個人が完全性を目指すときには社会的関係、他者との交わりが重要だからである。したがって、個人だけで自己の素質を発展させようとするときには、人間は自然法則の下にあり、それに身を委ねて、自然に従わなくてはならない。

「私が一つの身分を選ぶ場合、私はもちろん、ただ選ぶことができるためにも、予め自然に自己を委ねていなければならない。——というのも、私の中の様々な衝動が目覚めさせられていなければならないからである。しかし、私の中の様々な素質が意識へと高められていなければならないからである。しかし、私の全ての力と全ての自然の恩恵を唯一ないし若干の特定の才能の発展のためにもつばら適応させるために、選択自体において、私に自然が与えてくれるであろう或る誘因を、今後全く考慮しないと私は決心する。そして、私が自由な選択によって発展に専念するところの特別な才能によって私の身分が決まる」(VI S.318)

身分を決める際にも、人間は自然に身を委ねなければならない。なぜならば、人間は自己の状態や衝動を知るために反省を必要とするのだが、その反省の契機が自然だからである。そして、その自然と自己を照らし合わせて、自己に足りない部分を発展させていくのである。そして、自己の一面を発展させていくという選択によって身分が決定される。

この時、各個人は自然を全面的に改変する必要はない。もし、そのようなことを行うのであれば、人生は徒勞に終わる(VI S.319-320)。すでに自然は他者によって改変されているのである。この状態に対して、個人は安寧してはならない。

「人間はおそらく、自分の力自体を全く自然に直接向けることなしに、非常に快適な生活を送ること

ができるであろう。人間は、社会が既に行ったことや、社会が特に人間自身の形成のために行うことを単に享受することで、おそらく或る種の完全性を獲得できたであろう。しかし、人間はこのようなことをしてはならない。人間は少なくとも社会に対する責任を果たすよう努めなければならない」(VI S.319)

自然は既に開発されている。それを享受するだけで人間の完全性は果たせるかもしれない。しかし、人間は社会の中で生まれ出る以上、他者と共に自然を改変するという責任が求められている。その際、自然を全面的に改変する必要はない。各個人の特別な素質に基づいて一面的に自然を改変すればよい。

「人間はその他の素質に対する自分自身の修養を社会に委ね、自分が選んだ分野において社会を開発することを企図し、努力し、意志する。そして、人間は一つの身分を選んだのであり、この選択はそれ自体全く正当なものである。しかし、全ての作用が道徳法則一般の下にあるように、これが我々の行為の規則である限り、すなわち、定言命法の下にある限り、このような作用もまた自由である。その定言命法を私は次のように言う。汝の意志規定に関して決して汝自身と矛盾するな」(VI S.320)

人間は自分の選んだ分野を開発することに専念すればよい。その際の企図や努力といったものは社会によって決定されたのではなく、自ら自由に行うものである。こうして、一つの身分が生まれる。身分の選択は正当なものであるので、各個人の開発もまた正当なものである。そして、この身分の選択は自由であり、道徳法則に従うものである。身分の選択の際、人間は自分の意志に反するようなことを行ってはならない。自由であるからといえ、社会の開発に参加しないと、全面的な自然の開発を行うとかは意志規定に反する。人間は自己の意志に従うべきである。こうして、社会の身分が道徳的なものとして述べられるのである。そして、「各人は自己の形成を社会の利益のために実際にも適用させるべき義務がある」(VI S.321)。

「全く社会に役立とうと欲するだけでなく、自己の全ての尽力によって自己の最高の知を社会の最終目的に——人類をますます教化し、人類を自然の束縛からより一層自由に、つまり、より自立的で自己活動的にすることに向ける義務が各人にある。——そして、その場合、この新しい不平等によって新しい平等、すなわち、全ての個人における修養の様な進歩が生じる」(VI S.321)

各個人の発展は社会に寄与するべきである。それによって、人類は自然に打ち勝っていくことができるのである。それは人類をますます自由にさせるものである。しかし、各個人の発展はその力の差によって一様に行われるものではない。ここに不平等があるのだが、人類が自然からの自由を得ていく過程の中で、次第に平等になっていくものである。つまり、社会において各人がその身分の活動をつうじて、各人が相互に働きかけることによって、各人は自由になるのである。

5. 学者の使命

社会の一身分である学者についてフィヒテは次のように述べる。

「学問はそれ自体、人間的教養の一部門である。人間の全ての素質がさらに形成されるべきであるならば、人間的教養の各部門は促進させられねばならない。それ故、一つの特殊な身分を選んだ人間各人と同様に、学者それぞれには学問を、特に学者が選んだ学問の一部を更に進展させようと努力することが義務付けられる。各自の専門分野における人間それぞれと同様に、そのことは学者の義務である」(VI S.329)

社会における人間の使命同様、学者は学問領域の開発を行わなくてはならない。それが学者の義務である。人間的教養の各部門が促進させられるためには、学者は人々の先に立って、他の身分の人たちの導き手とならねばならない。もし、学者がそれを行わないのであれば、学者は身分を失い、何ものでもなくなる(cf. VI S.329)。

「学者各自は自身の専門領域を現実的に促進しなければならない、と私は言うのではない。学者がそれを行えないとすればどうなるであろうか。学者は専門領域を促進させる努力をしなければならず、学者が専門領域を促進させるまでは義務を果たしたとして休止したり——そう思ったりしてはならない、と私は言う」(VI S.329)

学者の専門領域の進展は現実的に行われなくてもいいが、しかし、学者は止むことなき努力を常に持つておかねばならない。学者の義務は果たされることはなく、無限の段階を持っている。そのため、学者は最期の時まで自己の義務を遂行しなければならない。

「学者は全く特に社会に対する使命がある。学者が学者である限り、どの身分よりもまして、学者は全く本質的に社会を通じて、社会のために現存している。したがって、学者は、卓抜にして可能な最高度において自己を形成するという義務、つまり、受容性と伝達力という社会的才能を持っている」(VI S.330)

学者は社会の一身分であるが、他の身分と違い社会の中で人々を教養育成する義務がある。そのため、学者は社会のために存在する。この時、最高度の自己形成、すなわち、自己自身との完全な一致という義務に対して、学者は受容性と伝達力を持っている。受容性は学者が自身より以前に存在している知を受け取る能力であり、経験的なものであって、単なる理性から生じたものではない(cf. VI S.330)。これに対して、伝達力は自己の知識を自分自身だけが所有するのではなく、社会のために所有していることである(cf. VI S.330)。これらは先に述べた受容の衝動と伝達衝動の具体的な表現である。社会において人間は互いに自己を高めていかねばならない。学者は受容性によって自己を高め、それを通じて社会に属する人間を高めていかねばならない。「学者は、自分が社会のために獲得した知見[Kenntniss]を今や社会の利益のために使用するべきである」(VI S.330)。その利益の方向性を定めるのが、学者の伝達力であろう。学者は人間だけでなく、社会をも変容する。なぜならば、人間が高められるのであれば、社会もまたその人間に相応しいものにならねばならないからである。

「さらには、全ての人間の内に真理の感情がある。これはもちろんそれだけでは十分ではなく、むしろ、発展され、吟味され、純化されなければならない。そして、このことがまさしく学者の課題である」(VI S.331)

真理の感情だけでは人間は自ら高まることはできない。学者が真理の感情によって他者を高める。真理の感情の分析は学者の使命である。この分析をつうじて学者自身が高まってゆく。こうして人間全体が人間の使命を果たす方向に高まっていく。そして、学者が「人類の教師」となる(ibid.)。学者は人間が停滞したり、後戻りしたりすることのないように配慮する。学者は高い目標を常に見ているが、人間をそのレベルに一気に引き上げることはできない。人間は徐々に高まっていくのである。学者はそうのように人間を引き上げる。この意味で、学者は「人類の教育者[Erzieher]」でもある(VI S.332)。この時、引き上げられる先は、道徳法則、自己自身との一致である。学者は道徳的方法以外で個人を引き上げることをしてはならない。そして、最終的には次のように言われる。

「あらゆる個別的な人間および社会全体の最終目的、したがってまた、社会における学者の仕事の最終目的は全人類の道徳的な洗練である」(ibid.)

学者はこの最終目的を常に持っていなければならない。それが学者の義務である。この時、洗練する仕方は言葉だけではない。「我々は単に言葉によって教えるのではない。我々はまた自身の事例によってはるかに徹底的に教える」(ibid.)。単に理論的に洗練させるのではなく、実践的に洗練されるのである。

「社会において生活しているものは皆、社会に対して善き事例であるという義務がある。というのも、事例の力は社会における我々の生活をつうじてはじめて生じるからである。修養の全ての部分におい

て他の身分に先立つべきである学者にとってこれはより一層大きな義務であろう」（VI S.332-333）

社会における各個人は他の人の実例、模範となることが義務付けられている。実際の社会生活の中で、その実例は生じる。その実例によって各個人は道徳的に善きものになっていく。これが新たな実例となり、他の人に働きかける。こうして互いに実例を示すことによって、道徳の高みへと上っていく。学者はこうした活動の先端に立つべきである。学者は他の人々に先立って、修養を積み、他の人々を導く義務がある。この義務が果たされないならば、学者は学者でなくなる。したがって、

「学者は自分の時代の道徳的に最善である人間であるべきである。学者は学者以上の可能な道徳的形成の最高段階を自己のうちに表現するべきである」（VI S.333）

学者はその時代の最高善をもっていなければならない。しかし、この最高善は単に静的に存在しているのではない。それは動的であって、常に最高の段階を超えていかねばならない。「このことが我々の共同の使命であり、我々の共同の運命である」（ibid.）。

6. 総括

人間（自我）は有限である。しかし、一方で「私の使命は永遠である。この使命と同様に私も永遠である」（VI S.323）。人間は永遠の使命を課せられている。これは、初期知識学の特徴でもあるが、自我の永遠なる努力による非我の克服として表される。人間は常に何ものと対峙している。それは自己自身であってもよい。しかし、純粹に自己自身にのみ対峙するのであれば、自我は不変であるが、意識を持たない状態になる。そこで経験的な自我が要請され、自我は限定される。そして、この限定からの解放が望まれる。つまり、人間の自然からの自由である。だが、このことは人間が果たせることではない。人間が人間である以上、有限である以上、無限への飛躍はできない（有限我は無限我にはなれない）。そして、人間は非我（自然）に従ってはいならない。もしそうであるならば、唯物論に陥る。人間は非我を永遠の彼方まで克服する。それが永遠の使命である。そして、使命が永遠であるので、その使命を果たす人間もまた永遠である。

この使命を果たすときに重要なのが修養である。非我を自我に変える技能が獲得されるときに修養が行われる。修養は自我の自己自身との一致の時に行われるものである。それは感性的ではあるが、無限への接近という理念に沿うものである。人間は感性という側面を持っている。そのため、無限への接近はあくまで理想でしかない。しかし、この理想を高く掲げて、自我は自己を変革しなければならない。自我はこうして自己自身を展開できるのである。

だが、人間は社会の中で存在している。人間が自己のみを形成・変革していくのであれば、それは社会の意義と異なるものである。社会において人間は自己自身だけではなく、他者をも変革しなければならない。人間は自己の素質に従って、自己を発展させることができる。しかし、それは人間の側面だけであって、人間の全面的な発展ではない。人間の使命は自己自身との一致というものであるが、これは人間が独りだけでなしうるものではない。各個人が相互に、協調して変革を行うべきである。各個人は互いに不足している部分を、あるいは未発達な部分を補い合い、形成しあうのである。この相互関係が社会を形成するのである。

このような社会で各個人の素質に従って、自己を発展させることで身分が生じる。この自己発展は自然（非我）との闘争によって行われる。常に自然と関わりを持つという点で、各個人は自然に依拠している。しかし、各個人が連携して自然に打ち勝つことができる。社会における人間は他者と連携する必要がある。

他者との関係において、各個人は伝達と受容という二つの活動を持っている。伝達において、他者の未発達な部分を促進させる。そして、受容において、自身が足りない部分を補ってもらう。この伝達と受容によって各個人は自己自身との一致を目指す。この時、各個人は一面的に自己を開発すればよい。何を開発するかは各個人の自由である。つまり、身分の選択については自由である。ただ、身分の選択が自由であるとはいえ、社会に寄与しないような選択はしてはならない。社会参加が重要である。社会において自由な各個人が相互作用するようにしなくてはならない。

このような身分制度の中で、学者は学問的知識の開発を行う。これが学者に課せられた義務である。学者は学問的知識の開発を行うよう努力すべきである。そして、学者は社会のために獲得した学問的知識を社会の利益になるよう使用しなければならない。それは真理の感情を通じて行われるものである。かくして、学

者は社会の利益となるように真理の感情に基づいて他者を開発する。これによって、学者は人類の教師あるいは教育者としての役割を担う。

人間は他者との関係の中で生きる。社会を他者に委ね、自らは何もしない、という態度は許されない。各自は自己自身の中にある理念、自己自身との一致という理念を持って、社会に関与しなければならない。さらに、各自は自己自身と矛盾することなく、自己の意志規定に従って、道徳的に自己を開発しなければならない。その中で特に学者は他者を促進させる使命を持っている。学者は常に限界を超えていく。学者以外の者は学者に従い、自己自身を矛盾させることなく、自己を開発する。人間はこのようにして生きていく。自己自身との一致という無限への活動を個人だけではなく、他者と共に、社会の発達と共に行っていかねばならない。その無限への進行を行うことが人間の使命である。つまり、最高善を持つ学者に従い、自己の修養によって訓練を重ね、そして無限進行への努力を常に繰り返していくということが人間に道徳的に課せられている⁴⁾。(了)

凡例

テキストはI.H.Fichte版 (*Johann Gottlieb Fichte's sämtliche Werke*, 11 Bde., Hrsg. von I.H.Fichte, Bonn, 1834-35 und Berlin, 1845-46 (Neudruck, Walter de Gruyter & Co., Berlin, 1971).) をメインにし、アカデミー版を随時参照した。書簡以外の引用のページ付けはI.H.Fichte版のものである。

訳出にあたっては、『フィヒテ全集』第22巻(哲書房:1988年)所収の『学者の使命に関する数回の講義』(隈元忠敬訳)を参照し、論者が訳出した。他の著作に関しても、日本語訳がある場合は、それを参照した。

原典での強調は全て下線で示した。

>

[]は論者による挿入である。

註

1 「絶対に産出する構想力の或る産物は、ぼんやりとし、反省されず、限定された意識に至らない直観によって、Cを超え無限の内に定立される。……この産物は非我であり、この非我の反立によって……自我一般がはじめて自我として限定される」(『全知識学の基礎』I S.235)

「人間精神は最初、ぼんやりとした感情……に導かれるのである。我々が後にはじめて明白に認識したものを、ぼんやりと感じ始めなかったならば、我々は今日なお、明白な概念をもっていないだろう……」(『知識学の概念について』I S.73)

2 経験において現れた異種的なものは、異種であるために、「自我の端的に同一であろうとする努力と必然的に」闘争する(『全知識学の基礎』I S.265)。

3 1795年8月30日付、フィヒテのヤコービ宛の書簡。

4 この議論から進んで、フィヒテは『自然法論』(1796)、『道徳論の体系』(1798)を公刊する。そこにおいては、各個人の相互承認、社会における人間の義務などが論じられていく。

参考文献

小村雷教:「初期フィヒテの人間観」, 姫路工業大学『姫路工業大学研究報告』第3号(一般教育関係) pp.1-28, 1954年

Der Bild eines Menschen in Fichtes “die Betsimmung des Gelehrten.”(1794)

Satoshi NAKASHIMA and Kuniaki MURASHITA*

*Department of Socio-Information, Faculty of Infomatics,
Okayama University of Science*

** Okayama University of Science, Docent*

1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan

(Received September 29, 2011; accepted November 7, 2011)

Zuerst macht Fichte eine Bestimmung eines Menschen zum Problem vom Bild eines Menschen. Der Mensch ist, weil er ist. Der Mensch bewältigt ewig Objekt. Eine Fähigkeit mit Objekt als Selbst wird gefunden, und sie wird als Kultur erworben. Bei dieser Kultur zielt der Mensch auf die beste Freiheit. Tätigkeit, um auf die Unendlichkeit zu zielen, wird gefordert, und dieses ist eine Bestimmung eines Menschen.

Zweitens macht Fichte Gesellschaft zum Problem. Der Mensch hat den Trieb. Er die Gesellschaft betretet und findet andere dort. Jedes Individuum muss gleich sein. Wenn jedes Individuum stärker gebunden wird, und die Bande breiten sich aus, bekommt der Mensch, dass eine Bestimmung die Wahrheit in der Gesellschaft erwirbt. Dann jede individuellen Arbeiten macht einander.

Schließlich macht Fichte die Bestimmung des Gelehrten zum Problem. Damit jeder Teil der menschlichen Kultur gefördert wird. Der Gelehrte muss der Leitungsweg von anderer gesellschaftlicher Position in Fortschritt machen. Er erwirbt Kultur vor anderen Menschen und hat Verpflichtung gegenüber anderen. Wenn diese Pflicht nicht erreicht wird, ist ein Gelehrter kein Gelehrter. Auf diese Art lebt der Mensch in den Verbindungen mit anderen. Man muß Tätigkeit zu Unendlichkeit mit sich selbst übereinzukommen aufführen. Man wird gesellschaftliche Entwicklung mit anderen sowie einem Individuum getan. Die Bestimmung eines Menschen ist Fortschritt zur Unendlichkeit aufführen. Und der Gelehrte mit dem höchsten Guten wird Übung auferlegt, dass das Ich immer moralisch zu unendlichem Fortschritt durch Kultur des Selbst strebt.